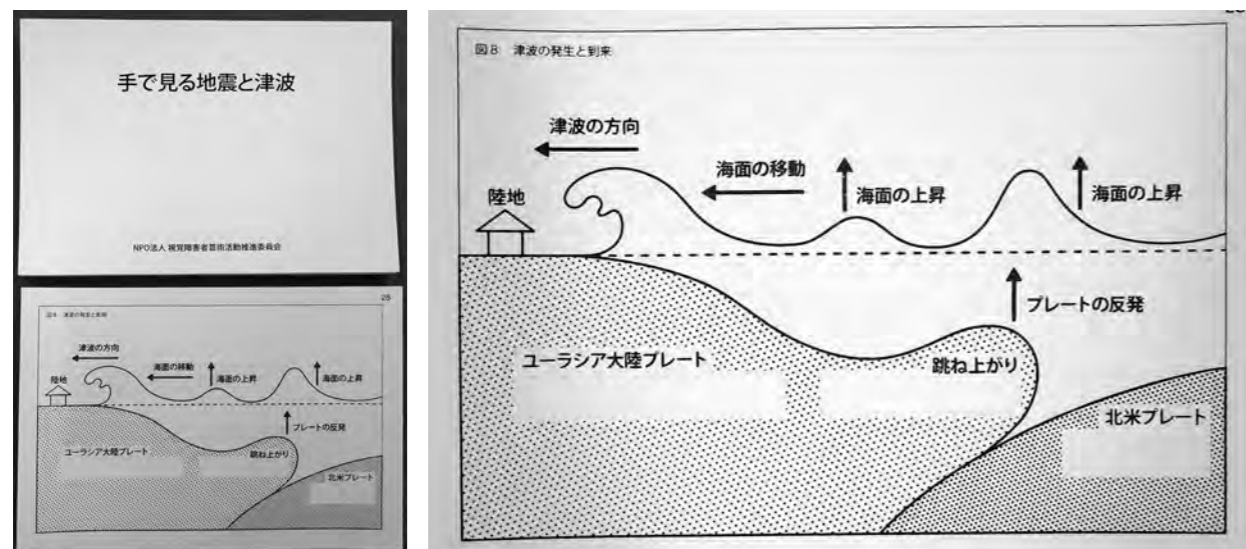


一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業 (みちびき・はぐくみ)

「触察本『地震と津波』の発行」事業

地震大国日本で視覚障がいを持つ子どもたちが手で触って自然災害について理解する本の制作

NPO法人視覚障害者芸術活動推進委員会では、目の見えない人が手で触って読む「触察本」の研究開発を進めている。2012年に絵を鑑賞する本『手で見る北斎』を出版したの続き、昨年度は地震と津波の発生の仕組みを触図(触ってわかる図や絵)を用いて子どもにもわかるように解説した触察本の制作に取り組んだ。



「手で見る地震と津波」試作版の表紙と触図

プレートの区別はドットの大きさや密度で表現

視覚的な情報を触覚的な表現に変えていく

東京都渋谷区に、視覚障がい者が彫刻に触って鑑賞できるギャラリーTOMがある。「ぼくたち盲人もロダンを見る権利がある」という創設者の子息の一言から生まれた美術館だ。2004年から美術館の副館長を務める岩崎清さんはこの考え方を絵にも広げるため、視覚障害者芸術活動推進委員会を立ち上げ、日本ではまだ遅れている触察本の開発に取り組んできた。昨年度手掛けた『手で見る地震と津波』は視覚障がい者が世の中を広く知るための本であり、前回AJOSCの助成を受けて発行した『手で見る北斎』とは目的もジャンルも異なる、触察本のさらなる挑戦でもある。きっかけは2011年に発生した東日本大震災だった。テ

レビや新聞では詳しい状況が報じられるが、いずれも画像や動画が中心で、とうてい視覚障がい者が理解できるようには配慮されていないものだ。そこで岩崎さんは、地震大国日本で目の見えない人、とりわけ経験や知識のない子どもが自然災害について理解するにはどう伝えたらよいかを考えた。

「たとえば波が高くなったという時、私たちは高さを測定しなくても画像や映像を見ればその強さはわかりますが、目が見えないと情報は抽象的で波の強さを感じることはできません。視覚的な情報を触覚的な表現に変えていくのが触察本です。触図で波の高さや強さを表すことはできないにしても、どんな原因で津波が起こり陸地に到達するかを表すことはできると思いました」。

わかっているという前提で表現しないことが大切

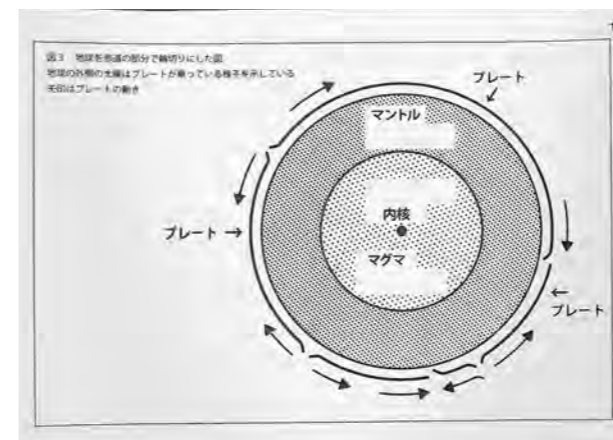
本書は、地震の原因となるプレートの移動や歪みとその結果として生じる津波のメカニズムをわかりやすく解説する内容で、墨字・点字によるテキストと、その図解である触図の順番で構成される。巻末には簡単な用語の説明があり、さらに、音声ガイドのCDが付く。なお、今回は点字のテキストを読みながら触図に触れられるように、製本はせずに箱に1枚ずつ入れるというこれまでにない形態を試みた。

触察本は盛り上がる特殊なインクで印刷される。その凸ラインを指でなぞれば図や絵の形がわかるという仕組みだ。プレートや断層などの区別は、ドットの大きさや密度の違いで表現される。特にドットの施し方については、試作段階で

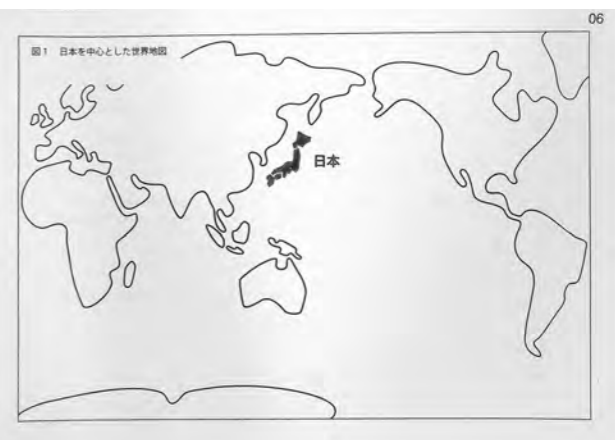
視覚障がい者に実際に触ってもらい修正を加えていった。また、触図以上に岩崎さんが気をつけたのが、テキストの表現である。「視覚障がい者に“これ”と言っただけでは、何が“これ”なのか説明を補充しないとわかりません。ですから指示代名詞のようなものは使わず、わかっているという前提で表現しないことが大切なのです」と説明する。テキストはすべて、岩崎さんが本や専門家の話を参考にして組み立てたという。

このようにして子どもにも容易に理解できるように推敲を重ねて完成した本は600部出版され、そのうち約100部を全国に約70ある盲学校と関係者に送る予定だ。

「子どもたちが触ってどんな反応をみせるのか楽しみです。これからも視覚障がい者が読んで知識の窓が広がるような触察本を作っていきたい」と岩崎さんは語る。



誌面は特殊なインクで印刷され、手で触ると凹凸がわかる



約100部を全国に約70ある盲学校と関係者に送った

助成団体: 特定非営利活動法人 視覚障害者芸術活動推進委員会



またひとつ新たな触察本を世に送ることができました

触察本の発行は、視覚障がい者の世界を広げるうえで意義のある仕事だと思っています。助成金がなかったら前回と同様、実現はかないませんでした。地味な仕事でありなかなか支援を得られないのが現状ですが、AJOSCには変わらず、彼らのような社会の少数派が豊かな生活を送るための活動に目を向けていていただきたいと思います。

NPO法人 視覚障害者芸術活動推進委員会
代表 岩崎清さん